中世文学を通してみる梶原景時

――京の文化と東国武士を視点として――

田中徳定

【キーワード】梶原景時／源頼朝／源義経／鎌倉殿の十三人／北条時政

はじめに

梶原景時といえば、讒言によって源義経を滅ぼした人物、という印象が強いだろう。これは、『平家物語』において、逆櫓論争による梶原景時と源義経の確執に端を発し、梶原景時が源頼朝に義経を讒言し、遂には義経を滅亡に追い込んだと語られていることが大きな要因である、と思われる。さらに、『義経記』に描かれる梶原景時像、幸若舞曲の義経を題材とした曲目における梶原景時像が、共通して奸佞な悪人として描かれたことによって、判官贔屓の浸透とともに、梶原景時悪人のイメージが定着していくことになった。

しかし、覚一本『平家物語』においては、確かに梶原景時は、源頼朝に義経を讒言したが、それは理由があってのことであったと語られている。小松和彦氏は、「物語は複数の出来事が因果の糸で結び合わされることで生み出され、この因果の連鎖を見出すのが「語り手」なのである。これは別の言葉でいえば、物語とは、語り手による出来事の意味づけであり解釈であるといえる」と述べている。[1]それでは、『平家物語』を含め、中世文学に記される梶原景時の「物語」には、語り手のどのような意味づけがなされているのだろうか。

また、鎌倉幕府の正史とされる『吾妻鏡』にも、梶原景時が、他の御家人を讒言したという記事が記されている。ここで、歴史書に記される「歴史的事実」について考えてみよう。

野家啓一氏は、歴史的事実の成立条件とは、「物語る」という言語行為を通じた思い出の構造化と共同化であると述べ、「歴史的事実は、ありのままの「客観的事実」であるよりは、むしろ物語行為によって幾重にも媒介され、変容された「解釈学的事実」と呼ばれねばならない」と述べている。氏は、当然予想される、歴史的事実の客観性は文献史料によって保証されているはずではないか、という反論に対して次のように述べる。

> 文献史料は言語による記述であることによって、ありのままの過去を再現する手段ではなく、すでに「解釈」の産物なのである。われわれは、たとえ知覚の現場で直接的に体験したことですら、それを完璧に再現し記述することはできない。意識的であろうと、無意識的であろうと、われわれが言語によって記述を行うとき、そこには関心の遠近法が働いており、記録に値する有意味な情報の取捨選択がなされているのである。その意味では、文献史料はすでに一つの「物語」を語っているのだと言ってよい。[2]

『吾妻鏡』は、北条氏による執権体制が固まった後に編纂された歴史書である。その成立背景を踏まえれば、『吾妻

鏡』に記された記事は、北条氏という視点のもとで「物語」られた「歴史的事実」であると考えるべきであろう。

『吾妻鏡』には、梶原景時は、源頼朝亡き後、御家人六十六人の連署によって弾劾され、鎌倉から追放され、京を目指して上洛する途次、駿河国において討たれてしまった、と記されている。それでは、その背景にあった景時を取り巻く鎌倉幕府内の状況や東国武士たちの感情とはどのようなものであったのだろうか。物語や歴史叙述を通して梶原景時という人物について考えてみようと思う。

一、覚一本『平家物語』に語られる梶原景時の「物語」

梶原景時が義経を讒言する原因となった出来事について、覚一本『平家物語』ではどのように語られているのか確認しておこう。

源氏の軍勢が、屋島に本拠を構えた平家を攻めるため、摂津国渡辺から四国に向けて出航しようとした時のことである。北風が激しく吹いて船が破損したため、軍議が行なわれた。梶原景時は、慣れぬ船戦に備え逆櫓を付けることを提案した。それに対し義経は、最初から逃げ支度をするとは何事だ、と頭ごなしに否定した。そんな義経を諭すように梶原景時は、良い大将軍というのは、攻めるときは攻め、引くべきところは引いて身を保ちながら敵を滅ぼすものである、一方だけに偏って融通が効かないのを猪武者と言うのだ、と言うと、義経は「猪のしし、鹿のししは知らず、いくさはただ平攻にせめて、かッたるぞ心地はよき」、と言い放ち、挑発的な態度で景時をやり込めた。周囲の侍たちは声を出しては笑わないが、目配せしたり鼻先で合図したりしてざわついたという[3]。

その夜、義経は荒波の中、自分の家来のみを率いて五艘で出航し、普段は三日かかるところを六時間で海を渡り（巻十一「逆櫓」）、平家の本拠を急襲して、平家一門を瀬戸内海海上に追い落す手柄をあげた。それから七日後、梶原景時が二百艘を率いて屋島に到着した。人々から「会にあはぬ花、六日の菖蒲、いさかひはててのちぎりきかな」（役立たず）と笑われ、軍奉行である梶原景時は面目を失うことになった（巻十一「志度合戦」）。

梶原景時は、侍所の所司であり、頼朝が軍奉行として義経軍に随行させた武士であり、実質的に軍を統括する立場にあった。景時が、荒れる海を前に、船戦の得意な平家軍との戦いを想定して、出来るだけ味方の損害を押さえる方策を立てるのは、軍を統括する者としての当然の務めである。また、景時が将軍としてのあり方を説いたのは、戦に慣れた年上の武士が若年の武士に戦のあり方を説いて聞かせる、指導者的意識からの発言であった。

この時、義経は二十七歳（一一五九年生まれ）。梶原景時の生年は不明であるが、長男、景季は一一六二年生まれである。義経とは親子ほども年の離れた梶原景時が、年長者として、若い将軍を導こうとしていたという設定が考えられるのである。ところが、義経は、年長者景時への敬意など微塵も見せないどころか、かえってやり込めようとした。景時は、義経のその態度をどのような思いでみたであろうか。

屋島合戦において面目を失った梶原景時は、壇ノ浦合戦における先陣を望んだ。しかし、平家との最後の合戦に心が逸る義経にはまったく先陣を譲る気がない。ついに諦めた梶原景時は、「天性この殿は侍の主にはなり難し」とつぶやく。それを聞いた義経は、「日本一のをこの者かな」（日本一の馬鹿者め）と太刀の柄に手をかけ、それに応じて梶原景時も太刀の柄に手をかけ、家来同士がにらみ合い、同士戦になる寸前、三浦義澄、土肥実平が両者に取りすがってなだめ、ようやく収まった。「それよりして梶原、判官をにくみそめて、つひに讒言してうしなひけるとぞきこえし」

と語られるのである。（巻十一「鶏合 壇ノ浦合戦」）

覚一本『平家物語』は、逆櫓論争だけではなく、その後日譚として壇ノ浦合戦における両者の衝突を語っている。逆櫓論争において面目を失った景時は、軍奉行としてのプライドもあり、壇ノ浦合戦においては是が非でも失地回復を図らねばならなかったのである。しかし、義経は、面目を重んじる武士の心情を解そうとしなかった。さらに、年長者にむかって「をこ」（ばか）という罵り言葉を投げつけた。そこには、長幼の序を重んじない義経の態度が語られている。

さらに、義経は、景時を「をこ」と罵ったばかりでなく、太刀の柄に手をかけている。先に仕掛けたのは義経であった、と語られていることに注意したい。多くの侍たちの面前で人を馬鹿呼ばわりし、さらに「殺すぞ」という脅しをかけてくる若造を許すことなどできようか。

壇ノ浦合戦を前にして、両者の衝突があったかどうかはわからないことである。しかし、覚一本『平家物語』は、逆櫓論争と壇ノ浦合戦前における二人の衝突という一連の話を通して、景時の心情を掬い取り、義経を憎み、讒言して滅ぼした背景にあった梶原景時の「物語」を語っているのである。

判官贔屓の風に当たっている私たちは、義経に肩入れして逆櫓論争と壇ノ浦合戦における二人の衝突の話を読んでいることはないだろうか。

景時が頼朝に、義経が平宗盛を護送して鎌倉に着く前に、義経は最後の敵であるとして語ったことも、景時の心情を踏まえて考えれば一概に責められるものではないだろう。

景時が「一をもッて万を察す」として、頼朝に語った義経反逆の理由は理の通ったものである。それは、一ノ谷の

合戦の勝利は自分の手柄だと誇り、生け捕った平重衡の身柄を、兄である範頼のもとに渡すことに反発して奪い取ろうとし、同士戦になるところであった、ということであった。それを聞いた頼朝は打ち頷いて、「今日九郎が鎌倉にいるなるに、おの〳〵用意し給へ」といい、大名小名が数千騎集まったという。頼朝は、景時の話によって「万を察」したのである。

景時の言は、『論語』「学而」篇の次の詞章に基づいていると考えることができる。

有子曰く、其の人と為りや孝弟にして、上を犯すを好む者は鮮なし。上を犯すを好まずして、乱を作すを好む者は、未だ之れ有らざるなり。（有先生の教え。その人柄が、父母に尽くし兄など年長者を敬うような場合、反逆を好むというような人間は少ない。反逆を好まない人柄であって、にもかかわらず反乱をしたがるというようなことは、絶対にない[4]）。

つまり、年長者を敬わない義経は「乱を作す」人間に他ならない。義経が兄範頼に取った態度を聞いた頼朝は、義経は必ず反逆する人間であることを即座に理解したのである。

出来事の裏側には、必ず人間の感情、情念が存在する。歴史は出来事だけを記すが、文学は出来事の背後にある、物事の真実を語っているといえよう。人にはそれぞれの「物語」があり、歴史は、人の作った「物語」によって作られている、といってもいいのではないか。

なお、『吾妻鏡』には、壇ノ浦合戦において平家が滅亡した約一ヶ月後に梶原景時から頼朝の元に書状が届き、そこには、「義経が、源氏の勝利は義経一人の功績であると誇っており、その驕り高ぶっている様子に兵士たちは皆戦戦兢兢とし、本心から従っている者はいない。義経の様子は頼朝様のお心に違うのではないかと諫めたところ、かえっ

てそれが仇となり、処罰されそうな状況である。平家との合戦が終わった今、早く鎌倉に帰参したい」旨が記されていた。『吾妻鏡』は、書状の文面に続いて、義経は勝手気ままの振る舞いがあり、景時以外の武士たちも義経に恨みを持っていることが記されている（文治元年〈一一八五〉四月二十一日条）。

これは、讒言というよりも事実を報告した、と見るべきであろう。

また、頼朝が義経の差し出す起請文を無視したのは、義経が頼朝の許可を得ないまま、従五位下に叙され検非違使尉に任じられた、という理由によるものであろう。

『吾妻鏡』によれば、頼朝は、頼朝の進上を経ないで朝廷から官職を受けた御家人に対し、墨俣から東には帰ってくるなといい、官職を受けた御家人の容姿をあげつらいながら口を極めて非難している。義経の任官は頼朝にとっては裏切り行為に他ならなかったのである。[5]

二、『義経記』、幸若舞曲に語られる梶原景時

梶原景時が義経を讒言して滅ぼしたというスタンスに立って、景時をより悪人に仕立てているのが、『義経記』である。義経を悲劇のヒーローに仕立てたこの物語においては、悲劇性をより際立たせるためには義経の敵役になる徹底した悪役が必要であった。『義経記』に語られる梶原景時の讒言とそれを受けた頼朝の対応は次のように語られている。

義経が鎌倉に帰参する前に景時が頼朝に行なった讒言とは、義経が、「平家を滅んだ後は、東国、西国に一人ずつ

将軍を置き、頼朝と義経がそれぞれの将軍になるだろう」と言っていること、屋島の合戦、壇ノ浦の合戦の勝利により、東国西国の武士がこぞって義経を尊敬しており、義経も野心があるので、末席の武士にまで目を掛け、武士たちが義経こそ武士の頭領になる存在だと心服しており、頼朝在世中はいざ知らず、子供の代にはどうなることか、と語ったことである。

しかし、頼朝はこの讒言だけで義経を疑うことはせず、義経が鎌倉に来たら両者を直接対面させて言い分を聞こうとする。対面させられたら不利になる景時は、起請文を書いて偽りのないことを言上した。そこで、景時を信じた頼朝は、川越太郎（義経の岳父）に義経討伐を命じる。しかし拒否され、頼朝は、畠山重忠に、伊豆・駿河を恩賞として与えることを条件に義経を討つように命じる。畠山重忠から、身内の義経を討つことの非を説かれた頼朝は、再び義経を討つ命令を下すことはなかった。それを聞いた義経は、野心を抱いていない旨をたびたび起請文に書いて奉ったが聞き入れて貰えず、大江広元あてに申状（腰越状）を差し出した。その内容を聞いた頼朝は涙を流し、それ以上義経を追求することを差し控えた。かくて一ヶ月が経ち、秋も半ばになったため義経は京に帰って行き、後白河院の覚えがめでたかったため京都守護になった。秋から冬になっても、梶原景時の怒りは収まらず、頼朝に対してしきりに讒言したので、頼朝も次第にその讒言を信じるようになり、義経に刺客を派遣した。

歴史的事実だけをみていけば、義経追討の院宣を後白河法皇に願い、義経探索と追討のため、朝廷に守護・地頭の設置を要求し、奥州藤原秀衡のもとに庇護されていた義経を、秀衡の死後にその子泰衡に圧力をかけて討たせた張本人は、源頼朝である。

しかし、『義経記』では、腰越状の内容を聞いた頼朝は涙するのであり、『義経記』の一諸本である赤木文庫本『義

経物語』では、奥州で討たれ鎌倉に運ばれてきた義経の首と対面した頼朝は涙を流し、義経の口中から出てきた「含状」の内容を聞いて「いよいよ御涙限り無し」と弟義経の死を悲しみ悼む兄の姿が強調されて語られるのである。[6]

また、幸若舞曲「腰越」では、義経が平宗盛を護送して酒匂に到着したことを聞いた頼朝は、「義経が、酒匂まで下りけるかや。めでたさよ」と喜び、対面する見参所まで新たに作ろうとする。しかし、義経が鎌倉に来れば、逆櫓論争の恨みから義経に斬られると警戒した景時が、逢坂山には凶徒がいるゆえ、義経に京都を守護させるように進言し、それを間に受けた頼朝が義経に上京するよう伝えるという内容になっており、頼朝は、義経に警戒心すら抱いていない。[7]

このように、梶原景時が悪役として強調されていくことと反比例して、頼朝は思いやりのある兄として語られていくようになる。

その背景には、中世から近世において、武家政権を創出させた源頼朝は不可侵的な存在になっていき、頼朝の時代が一つの黄金時代であり、後世の武士の仰ぐ時代として認識されるようになっていくことがあった。[8]

さらに、源平合戦期の動乱を収めた頼朝から、次第に「頼朝による平和」を武家政権そのものの由来譚として語るものとなり、ついに寿祝の対象となっていく。それゆえ、「頼朝へのたたりの伝承が存在しても頼朝断罪には結びつけないのが中世文学の主流であった」という。[9]

このような風潮の中で、頼朝に義経を讒言した梶原景時が、本来頼朝が背負うはずであった「悪」の部分を背負わされていったのである。

三、『吾妻鏡』にみる梶原景時讒言の記事について

梶原景時が讒言を行う人物であったと認識されていることには、『吾妻鏡』における梶原景時讒言の記事も大きく関わっていると思われる。中でも、結城朝光が阿波局から、景時が源頼家に讒訴したと告げ口された際に相談した三浦義村が言った言葉、「凡そ文治より以降、景時の讒に依り、命を殞し、職を失ふの輩、勝て計ふべからず」がその印象を強くしていると思われる。

しかし、『吾妻鏡』に記される梶原景時讒言に関わる記事をみていくと、必ずしも梶原景時讒言とはいえない事例も含まれていると思われる。『吾妻鏡』は、梶原景時を滅ぼした北条氏による幕府の歴史書であるということを考慮する必要がある。『吾妻鏡』は、北条氏による「物語」であるという性格を免れることは出来ないのである。

○『吾妻鏡』文治三年（一一八七）三月十日条

梶原景時は、夜須七郎行宗が壇ノ浦合戦の際に、平家の家人を生け捕ったとする主張を認めなかったが、行宗の言を証明する人物がいたため、頼朝は行宗を賞し、景時には「讒訴の科」として鎌倉の道路普請を命じた。

景時が行宗の主張を認めなかったのは、壇ノ浦合戦に「夜須」なる兵はおらず、行宗が生け捕ったと主張する平家の家人は投降してきた輩であるからである。軍奉行として従軍していた景時が、戦いに参加していた源氏の兵の戦果を把握していたと見るのが普通であろう。行宗は、手柄を認めるように日頃言上したが、景時が妨害したと主張し、春日部兵衛尉と同船していたと述べた。そこで春日部が呼ばれ証人となって賞が加えられたのである。

しかし、木曾義仲討伐の際における、頼朝が感心した景時の報告書[10]から考えて、おそらく、軍奉行をしていた景時

の主張は正しかったのではないか。壇ノ浦合戦からすでに二年が経過した後のことである。景時は行宗の主張に対し、「年序を経るの後、行宗奸曲を廻らし、子細を申す」と言っているように、行宗は後日になって春日部に証人を頼んだのではないかと推測されるのである。

夜須七郎行宗は、平治の乱によって土佐に流された頼朝の同母弟希義を援助した土地の豪族である。頼朝の挙兵によって平家に危険視された希義は、夜須行宗を頼って夜須荘に向かう途中、平重盛の家人、蓮池家綱・平田俊遠によって討たれてしまう。希義救援に向かった行宗は、途中で希義の死の報を聞いた。行宗は、蓮池・平田の追跡を受け、謀って行宗を殺そうとした蓮池家綱の策略を躱し、船で紀伊国に逃れた（『吾妻鏡』寿永元年〈一一八二〉九月二十五日条）。希義の死を悲しんだ頼朝は、同年十一月二十日に源有綱を派遣して蓮池・平田を討った（『吾妻鏡』同日条）。このような経緯があり、希義を援助した夜須行宗への配慮から（おそらく梶原景時が正しいと思われるが）夜須行宗の言い分を聞いて、（夜須行宗が頼んで証人を立てたとしても）行宗の顔を立てて手柄を認めてやった、というのが真相ではないか。

『吾妻鏡』建久六年（一一九五）七月十一日条には、夜須行宗の本領が安堵された記事があり、「これ土佐冠者（希義）討ち取られたまふの時、身命を惜しまず、怨敵蓮池権守（家綱）を討ち取りてより以降、度々勲功ありと云々」と記されている。文治三年三月十日の記事における平家の家人生け捕りによる賞も、度々の「勲功」の一つだったのではないかと思われる。

○『吾妻鏡』建久三年（一一九二）十一月二十五日条

熊谷直実と久下直光の土地境界争いにおいて、直実は、景時が直光に肩入れをしていて公平でないと訴え訴訟

の場から逐電し出家してしまった。

幼くして父を亡くした熊谷直実は、伯父である久下直光の庇護を受け、武士として自立できる年齢になっても久下氏の家人か被官の立場であった。久下直光との境界争いになった熊谷郷は久下郷から分出した郷である可能性が高く、久下直光の父が、婿になった直実の父直貞に領有の便宜を与えた所領と考えられている。京の大番役に上った直実は、久下氏の家人扱いに嫌気がさして平知盛の家人となり、後に頼朝に仕えて源平の合戦に参加した。頼朝は、命令に従って戦闘に参加し手柄を立てた者を、所領の大小に関わりなく、新しい武士身分「御家人」に列した。直実は、戦場で功をたて御家人に取りたてて貰うことを願ったのである。

『平家物語』一ノ谷の合戦において、搦め手の義経軍に編成されていた直実が、息子直家とともに部隊を抜けだし、本隊が向かう播磨路に廻って一ノ谷の先駆けをしようとしたのも一番乗りの手柄をあげるためであった。また、敗走する平家軍を追って、「あッぱれ。よからう大将軍にくまばや」（覚一本『平家物語』巻九「敦盛最期」）と、身分の高い武将を狙ったのも、御家人として取り立てて貰いたいという直実の切実な思いによるものである。源平合戦後、御家人に取りたてられ、熊谷郷の支配権を認めてもらったが、久下氏からすれば、もともと久下氏の所領であるから認めるわけにはいかない。

頼朝の前で行なわれた裁決において、直実は「十知の才」がなかった（聞かれたことについて何を聞かれているのか理解力に欠けた）ため、頼朝から再三質問があった。すると直実は、景時が直光に肩入れしていて公平で無いと言って、証拠の文書をその場に投げ捨てると、詰所において自ら髻を切り落とし御所から走り出て出奔してしまった。あまりのことに頼朝も驚いた、という。

しかし、熊谷直実が息子直家に熊谷郷を与えた譲状（「蓮生譲状」）には建久二年三月一日の日付があり、「地頭僧蓮生」の署判があることから、『吾妻鏡』のこの記事自体、作為的に作られ建久三年十一月二十五日条に入れられたものと考えられている。[11]

となると、熊谷直実（蓮生）と久下直光との間に所領の境界を廻る論争があったとしても、梶原景時が久下直光に肩入れをしたということは創作であったと考えたほうがよいだろう。

『吾妻鏡』が、北条執権政治になってから幕府によって編纂された歴史書であることを踏まえれば、本書を編纂する際に、北条氏によって排除・討滅された梶原景時を讒言者に仕立てるという姿勢があったことは十分考えられ、その方針に従って景時の久下直光肩入れ説が補入された、と考えられるのである。

○『吾妻鏡』建久四年（一一九三）十一月二十八日条

越後守安田義資が梟首された。これは、前日の永福寺薬師堂供養の際に、義資が女房たちの聴聞所に艶書を投げ入れたことを梶原景季の妾が景季に語り、それが景時に伝わり、景時が頼朝に言上したためである。

安田義資は、甲斐源氏の一族である。父安田義定は、平家討滅に参戦して以来、甲斐源氏の一方の雄として、絶えず甲斐源氏の先頭に立って上洛を目指し、寿永二年（一一八三）には、木曾義仲とともに入京し、従五位下遠江守に任じられている。木曾義仲追討、平家追討において活躍した武将であり、鎌倉幕府草創以来隠然たる勢力を保っていた。しかし、この事件の後、十二月にはこの事件の責任を負わされて遠江国の所領を没収され、さらに翌年八月十九日には謀反を企てたとして梟首されてしまった。また、義定が処刑された翌二十日には、義定の伴類が鎌倉で処刑されている。義資梟首に始まる、この一連の粛清は、甲斐源氏一族を弱体化させるためであった、と考えられるのである。

となると、景時の讒言は、景時の悪意から出たものではなく、頼朝が日頃景時に洩らしていた甲斐源氏粛清の方針を受けてのものではなかったか、と思われるのである。[12]

四、源頼朝と梶原景時との関係

梶原景時は、『吾妻鏡』に頼朝の「寵愛殆ど傍人に越ゆ[13]」と記される御家人である。頼朝はなぜ景時を重用したのだろうか、頼朝との関係について考えてみよう。

源頼朝と梶原景時との関係は、石橋山の合戦において、頼朝が大庭景親軍に敗北し山中に隠れていた際、梶原景時が頼朝の在処を知りながら、大庭景親の手を引き、傍らの峰に登って探索の眼をそらし頼朝の危機を救ったことに始まるという（『吾妻鏡』治承四年〈一一八〇〉八月二十四日条）。その年の十二月、景時は土肥実平を介して頼朝の元に参り、翌年一月十一日、頼朝と対面した。文筆に携わらないが「言語に巧なる士」であり、たいそう頼朝の意に叶ったという（『吾妻鏡』同日条）。

なお、『愚管抄』には、「サテ治承四年ヨリ（頼朝が）事ヲオコシテウチ出ケルニハ、梶原平三景時、土肥次郎実平、舅ノ伊豆ノ北条四郎時政、コレラヲグシテ東国ヲウチ従ヘントシケル」とあり、[14]頼朝の挙兵当初より梶原景時が参画していた、と記されており、京においてはそのように理解されていた。また、頼朝の家来のトップにその名が上げられていることから、慈円は、梶原景時が頼朝第一の側近であると理解していたと思われる。

寿永二年（一一八三）十二月二十日、景時は、頼朝の命令によって上総介広常を暗殺する。上総介広常は房総半島

一帯を支配する豪族的武士である。広常が頼朝軍に参加したことで東国武士団の頼朝に従う帰趨が決定づけられたといわれる。しかし、広常は兵力もあり、また、頼朝に下馬の礼を取らないなど不遜な振る舞いがあったため、頼朝にとっては警戒すべき武士であった。そのため、広常排除を意図した頼朝の命令を受けた景時によって暗殺されたのである。景時は、上総介広常と双六をし、さりげなく盤を越えて広常を討ったという（『愚管抄』）。ここからは、梶原景時は、頼朝からよほど厚い信頼を得ていた武士であり、また冷静沈着かつ豪胆な武士であったことが知られる。

元暦元年（一一八四）正月二十七日、木曾義仲討伐の合戦の結果について、安田義定、源範頼、源義経、一条忠頼らの飛脚が到着し報告した。しかしその報告は頼朝にとって要領を得ないものであった。その後、梶原景時の飛脚が到着し、討ち取ったり捕らえたりした者の名を記録した一覧を持参した。その思慮に頼朝が非常に感心したことが記されている。（『吾妻鏡』同日条）

討ち取ったり捕らえたりした者の記録は、戦果が一目でわかるだけでなく、その後の恩賞にも関わってくるものである。景時は、報告においては何が必要であるかを理解し、後日の備えまで考慮して行動する有能な人物であったことがうかがわれるのである。[15]

また、頼朝と景時が連歌を詠み合う話が諸文献に記されていることから、景時は、他の御家人にはない、文化的側面を頼朝と共有していたことがうかがわれる。

頼朝と景時の連歌については、『吾妻鏡』建久元年十月十八日条に、頼朝が最初の上洛をした際に、橋本駅において集まった遊女たちに贈り物をした。その贈り物をする前に、「はしもとの君にはなにをわたすべき」と詠み、景時が「たたそまかはのくれてすきはや」と付けたことが記されている。[16]

また、『沙石集』に、次のような頼朝と景時の連歌の話が記されている。[17]

白けて見ゆる昼狐かな

と仰せられて、「梶原付けよ」と宣ひければ、

契りあらば夜こそこんといふべきに

奥入りの時、名取河にて、

頼朝が今日の軍に名取河

と宣ひて「梶原付けよ」と仰せられければ、

君もろともにかちわたりせむ

ここからは、頼朝と景時は、まさに打てば響くような連歌のやりとりをしていることがうかがわれる。狩りにおいても奥州征伐においても、景時は、常に頼朝の近くに付き従っていたこと、「頼朝が」の連歌からは、主君を予祝する臣下の役目を負っていたこともうかがわれるのである。[18]

頼朝と景時の連歌については、真名本『曾我物語』にもみえている。[19]

一つは、『沙石集』に載せる頼朝と景時による「狐」を題にした連歌である。真名本『曾我物語』巻五「三原・長倉の狩」では、梶原景時が「浅間に鳴ける昼狐かな」と口ずさみ、それに海野小太郎行（幸）氏が「忍びて夜こそこうといふべきに」と付け、感心した頼朝が両人に馬を与えた、という内容である。

また、巻五「頼朝、那須野に向かう」では、源頼朝が赤城山から下野国に行き、笠懸原から赤城山を見て、「赤城山さすがに塚と見ゆる哉」（赤城山はさすがに立派な山と見えるなあ）。と口ずさむと、梶原景時がすぐさま「越路の

ひともさや思ふらん」（さよう、越路の人もそう思うことでしょう―腰の小刀〈さすが〉の柄は見事な赤木だが、鞘もまた同様に思われるよ）と下の句を付け、この歌の引き出物として、梶原景時は武蔵国の多摩川七郷を賜った、というものである。

『曾我物語』の成立について、角川源義氏は、『原曾我物語』は事件後まもなく成立したとして、作者の一人に箱根山所在の太夫房覚明をあてている。そして『吾妻鏡』の編纂時期に中間真名本が成立し、作者には伊豆山密厳院所属の安居院唱導家が参加したという。さらに現存の真名本十巻は鎌倉末期から南北朝以前に関東の時宗教団の手によって御霊信仰の要素が加えられて成立したと推測している。[20]

ところで、連歌であるが、連歌は座の文学である。場を同じくして発想や感性が通じ合うことに面白さを感じる文学であり、いわば、連帯感をベースにした文芸であるといってもよいだろう。

そう考えると、頼朝と景時の連歌のやりとりの話は、和歌や連歌に馴染んでいたということとともに、頼朝と景時とが共有していた連帯感を語る話でもあるといえよう。

『沙石集』が、梶原景時の子孫と考えられる無住の著作であることと、『曾我物語』の成立圏を考慮すると、東国において、景時が連歌に巧みであったことが、頼朝が景時を寵愛した大きな要因であったと認識されていたことがうかがわれる。

五、梶原景時一家と和歌

源頼朝が和歌に関心が深く、また巧みであったことは、『新古今和歌集』に二首入首し、『新古今和歌集』以下の勅撰集に十首入集していること、また、慈円の『拾玉集』には、頼朝とのやりとりのいわゆる「消息歌」が七十七首あり、その約半分が頼朝の和歌であることからもうかがわれる。

頼朝が慈円と和歌の贈答を行なっており、和歌に巧みであったことは、『十訓抄』十ノ五十五にも次のように記されている。

鎌倉右大将、父子ともに、代々撰集に入り給ひけるこそ、殊にやさしけれ。中にも右大将都へ上り給ひけるに、吉水大僧正、「何事も、思ふばかりはえこそ」など聞えられたりける返事に、「みちのくのいはでしのぶはえぞ知らぬかきつくしてよつぼの石ぶみ」とよまれたる、面白くたくみにこそ聞ゆれ。[21]

その頼朝と和歌の風雅を共有できたのが梶原景時であった。そして、『吾妻鏡』の次の記事からは、梶原景時が和歌にも堪能であったことがうかがわれる。

建久六年（一一九五）五月二十七日、頼朝は景時を使者として住吉大社に奉幣した。

将軍家、梶原平三景時を以て御使となし、住吉社に奉幣せしめ給ひ、神馬を奉らる。今夕、景時社頭に参著し、和歌一首を釣殿の柱に註し付くと云々。

我君の手向の駒を引つれて行末遠きしるしあらはせ

住吉大社は、平安時代以来、和歌の神として信仰された神社として知られている。頼朝は幕府の為政者として、各

地の神社に奉幣し、武家政権への神の加護を頼んだものと思われるが[22]、住吉大社への奉幣には、和歌が詠める使者である必要があった。梶原景時が派遣されたのは、住吉大社の神前に和歌を奉納する能力があったからである。景時は、頼朝の期待通りに立派に和歌を奉納して役目を果たしている。鎌倉武士の中には、景時以外にこの使者が務まる御家人はいなかったのではないか。

景時だけではなく、景時の息子たちも和歌に堪能であった。『吾妻鏡』文治五年（一一九八）七月二十九日条には、梶原景時の長男景季に関する次のような記事がある。

白河の関を越えたまふ。関の明神に御奉幣。この間景季を召し、当時初秋の候なり。能因法師が古風思い出でざるやの由仰せ出さる。景季馬をひかへて、一首を詠ず。

秋風に草木の露を払はせて君が越ゆれば関守もなし

奥州征伐の途次のことである。頼朝は、白河の関を越えた際に関の明神に奉幣し、景季を招くと、「今は初秋の季節である。能因法師の故事が思い出されるではないか」と言った。言わずと知れた、能因法師の和歌「都をば霞とともに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の関」である。景季は馬を控えて、「秋風に露払いをさせて、頼朝様が白河の関を越えて行くとき、それを妨げる関守もおりません」、と奥州征伐の勝利を予祝する和歌を詠んだのである。

頼朝が景季を招いたのは、能因の故事、すなわち和歌の風流を共有できる相手であったからである。また、景時の次男、景高についても類似した記事が、『吾妻鏡』文治五年（一一八九）八月二十一日条に記されている。

ここに二品、松山道を経、津久毛橋に到りたまふ。梶原平二景高、一首の和歌を詠ずるの由、これを申す。

陸奥の勢は御方に津久毛橋渡して懸けん泰衡が頸

祝言の由、御感ありと云々。

同じく奥州征伐の途次、景高は津久毛橋に到った頼朝に、「陸奥の兵たちは味方に付く、という名のつくも橋を渡り、藤原泰衡に勝利してその首を掛けましょう」、と景季同様、頼朝の勝利を和歌で予祝しているのである。『沙石集』に見られるように、梶原景時、その子息とも和歌に堪能であり、かつ頼朝近くに仕え、和歌をもって頼朝を予祝する役目を負っていたことがうかがわれるのである。

では、梶原景時一家は、どのようにして和歌を習得したのであろうか。

『吾妻鏡』建久二年（一一九一）閏十二月二十五日条に、京の徳大寺実定が亡くなったことが梶原景時の弟朝景によってもたらされ、訃報を聞いた頼朝が深く嘆いたことが、次のように記されている。

幕下（源頼朝）嘆息したまふ。関東に由緒ありて、日来これを重んぜらるるところなり。梶原はまた朝景・景時共に以てかの恩沢に浴すと云々。景時は、幕下の御吹挙に依りて、先年美作国の目代となると云々

この記事からは、梶原景時・朝景兄弟は徳大寺実定とつながりを持っていたことが知られる。さらに、景時が頼朝の推挙によって目代になった美作国は、平家滅亡後、徳大寺実定の弟徳大寺実家に与えられたもの（『吾妻鏡』文治元年〈一一八五〉十二月六日条）であることから、頼朝、徳大寺家、景時三者の親密な関係をうかがうことができるのである。

なお、徳大寺実定は、頼朝が十二歳で皇后宮権少進に就任した時の皇后宮大夫である。平家滅亡後、頼朝が鎌倉方に近い公卿十人を指名して朝務を行なわせた議奏公卿の一人で、歌人としても名高く、『千載和歌集』以下の勅撰集に七十八首入集し、多くの歌合に名を連ねている。

ところで、和歌は、洗練された言葉によって一つの世界を創出する芸術である。歌語として洗練された言葉を用いることが要求され、作歌のルールも心得ていなければならない。当然歌語の持つ意味や、『古今和歌集』以来の和歌や歌人についての知識も求められる。つまり、和歌を学ぶことは貴族社会の文化コードを学ぶことでもあった。

徳大寺実定と梶原一家とのつながりとみるとき、梶原景時のみならず、その子息たちも徳大寺家とのつながりの中で和歌を学んでいたであろうこと、また、和歌に留まらず、和歌を中心として貴族社会における教養や風流も身につけていたであろうことが推測されるのである。

景時以外に、鎌倉武士の中にこのような貴族社会の文化や教養を身につけていた武士が他にいたであろうか。おそらく、梶原景時一族は、東国武士にはない京の香を身にまとっていたのではないか、と思われるのである。

『平家物語』の諸本において、梶原景時を始め、梶原景季、景高に関して、和歌や風流を語る多くの話が収められているのも、梶原景時一族が、風雅な一族として認められており、またその伝承も多く残っていたためであると考えられるのである。[23]

東国において作られたと考えられている『源平闘諍録』において[24]一ノ谷合戦の際に、景時が腰に桜の枝を差して行くの見た平重衡が、和歌の上の句を詠み掛け、それに景時が答えた、次のような逸話が記されている。

梶原、桜の面白かりけるを腰に差して馳せ行きけるを、本三位中将此れを見て、

物武能桜狩古曾与志奈希礼

〈もののふの桜狩りこそよしなけれ〉

左云ひ送られたりければ、梶原取り敢へず、

生取土覧多免土思江波
〈生け取りとらんためと思へば〉
左楚申しける。

このような逸話が語られたのは、東国において景時の風流な面が伝承されていたからであろう。[25]

それでは、東国の在地色の濃い性格を持つ『源平盛衰記』に、このような風雅な梶原景時像が語られた背景とはどのようなものだろうか。

一ノ谷の合戦において、平敦盛を討った熊谷直実が、敦盛が錦の袋に入れた笛を腰に差していたのを見て、「当時みかたに東国の勢何万騎かあるらめども、いくさの陣へ笛持つ人はよもあらじ。上臈は猶やさしかりけり」（覚一本『平家物語』巻九「敦盛最期」）と、東国武士と比較して、貴族化した平家の武将の優雅さに感嘆する場面があるが、『源平闘諍録』の景時像は、この敦盛よりもさらに風雅な面が強調されているとみてよいだろう。

『源平闘諍録』の景時の記事は、東国における梶原景時の伝承を取り入れたものであることを踏まえると、これが、東国における梶原景時のイメージを物語っていると考えることができる。つまり、景時は、東国武士とは明らかに異質な京の「雅」を身にまとった武士としてイメージされていたということである。

六、東国武士と京の文化

それでは、東国武士は京の風雅な文化をどのようにみていたのであろうか。『吾妻鏡』元暦元年（一一八四）十一

月一四日条に次のような記事がある。

頼朝は右筆であった藤原俊兼を召した。俊兼は日頃華美を好んでおり、この日は特に着飾り、小袖を十枚以上着て、その褄は重ね色になっていた。それを見た頼朝は、俊兼に刀を出させ、その刀で小袖の褄を切り取ってこう言った。「お前は知恵や能力のある者だから、倹約ということを知らないわけはあるまい。それに対して、「常胤・実平がごときは、清濁を分たざるの武士」[26]である。所領は俊兼より比べものにならないくらい多いが、彼等は、衣服から品物まで粗末な物を用いて美麗を好まない。だから彼等の家は富み、多くの郎従を扶持して勲功をたてようと励んでいる。お前は財産の使う所を知らず、分に過ぎた贅沢をしている」。それを聞いた俊兼は頭を垂れてかしこまった。頼朝が、「今後贅沢を止めるかどうか」と問うと、俊兼は「止める」と答えた。そこに居合わせた大江広元と藤原邦通（ともに文官）は肝を冷やす思いであった。

頼朝が、「常胤・実平がごときは、清濁を分たざるの武士」と言っているのは、千葉常胤や土肥実平らは分別がない（善悪や優劣などを判断することができない）武士であるということで、つまりは京から下ってきた文官とは違い、教養のない武士であると言っているのである。京から下ってきている文官の衣服は、京の生活そのままであって、俊兼は華美を好んだというが、京であったらそれほど贅沢というものではなかったかもしれない。しかし、東国武士の衣服は粗末であった。東国武士たちは、京から来て、自分たちとは違う華やかな衣服に身を包む文官たちをどのような眼でみていたのだろうか。

服装が違うということは文化が異なるということであり、これほどはっきりと眼に見える形で京と東国との文化の違いを分からせるものはない。おそらく言葉遣いも違ったのではないか。[27]

京風の華美な衣服は、当然、質素な生活をして倹約を心がけている鎌倉武士たちの反発を招いたであろうことが想像されるのである。頼朝には、東国武士たちが京都から下ってきている文官に抱く反感を痛いほど察することができたのではないかと思われる。

その場に居合わせた中原広元、藤原邦通は驚き恐れ肝を冷やした、と記されることからは、おそらく、藤原俊兼の小袖の褄を切ることで、文官全体を誡めたのではないか。その背後には、東国武士の中に、京風の衣服に身を包み、教養のあるところを見せつける文官たちを面白く思わない、密かな反発心（妬みの感情）があったことがうかがわれる。平家討滅という、同じ目標を達成するためには、皆仲間であるという共同体意識が不可欠である。

文官は朝廷との交渉において欠くことの出来ない存在であるが、東国武士たちとの間に必要のない軋轢が生じることは、幕府体制そのものにひびが入ることになりかねない。そこで頼朝は、あえて藤原俊兼の小袖の褄を切り、贅沢を誡めることで、東国武士たちの間に流れていたであろう文官への反発心を押さえた、と考えられるのである。

また、東国武士が東国武士の気風と比較して京の文化を快く思わなかったことは、源実朝が将軍であった時、長沼五郎宗政が、謀反の疑いのあった畠山重忠の子重慶を討った際に、源実朝に向かって言った言葉にも表れている。

畠山重忠の子重慶が謀反を企てているとの訴えがあり、源実朝は、長沼五郎宗政に重慶を生け捕るように命じた。しかし、その七日後、宗政は重慶の首を持参した。生け捕るように命じたのに誅殺するとは軽はずみであるとして不興を蒙った宗政は、「当代（実朝）は歌鞠をもつて業となし、武芸廃るるに似たり」と批判した（『吾妻鏡』建保元年〈一二一三〉九月二十六日条）。実朝の時代になっても、東国武士は、京の文化である和歌や蹴鞠に対して、東国武士が重んじる武芸とは相容れないものであるという意識を持ち、それに打ち込む実朝を苦々しい思いで見ていた様子が

うかがわれるのである。

七、源頼朝と朝廷

源平の合戦の最中、源頼朝は、御家人が朝廷から官職を受けることで、朝廷の支配下に組み込まれることを最も警戒していた。頼朝自身、建久元年（一一九〇）十一月に上洛した際に、後白河法皇が任じた権大納言（十一月九日）、右近衛大将（同二十四日）の官職を、十二月三日にはいずれも辞退している。しかし、『愚管抄』建久三年（一一九二）三月十三日の後白河法皇崩御の記事において、後鳥羽天皇は「殿下（九条兼実）、カマ倉ノ将軍（源頼朝）仰セ合ツツ、世ノ御政（おんまつりこと）ハアリケリ」と記されているように、後鳥羽天皇の治世になると、頼朝は、九条兼実を介して、朝廷政治に関わっていくようになる。

さらに頼朝は、政治に関わるだけでなく、建久六年（一一九六）、長女大姫を後鳥羽天皇に入内させようと丹後局、土御門通親を通じて入内工作を行っている[28]。

頼朝は、それまで、後鳥羽天皇の摂政関白であった九条兼実を朝廷とのパイプ役にしていたが、九条兼実の娘任子が後鳥羽天皇に入内していたため、我が娘のライバルとなる九条兼実を避け、九条兼実の政治上のライバルであった土御門通親を通じて大姫の入内話を進めようとした[29]。

その年、九条兼実の娘からは内親王が誕生し、兼実の外戚になるという夢は叶わなかった。

その翌年建久七年（一一九七）、九条兼実が失脚し、兼実の娘任子も宮中から退出させられてしまう。『愚管抄』は、

その背後では、「コノ頼朝ガムスメヲ内ヘマイラセンノ心フカク付テアルヲ」（頼朝が自分の娘〈大姫〉を入内させたいという考えを深く抱くようになり）として、土御門通親のもとに「ワガムスメマイラセムト云文カヨハシケリ」（わたくしの娘を後鳥羽天皇に差し上げたいという手紙を送った）と記している。

大姫入内問題は、建久八年（一一九八）、大姫が亡くなったことで立ち消えとなったが、頼朝は、娘の入内を諦めておらず、次に次女を入内させようと考えていた。『愚管抄』には、「頼朝コノ後京ノ事ドモ聞テ、猶次ノムスメヲグシテノボランズト聞ヘテ、建久九年ハスグル程ニ」と記されている。

大姫入内問題は頼朝の失政とされるが、次女乙姫まで入内させようとしていたことをみると、頼朝には、娘を入内させて、天皇の外戚になり朝廷の政治に深く関わろうという野心があったとみてよいだろう。

なお、頼朝の次女について、『吾妻鏡』には、「乙姫君と号す、字は三幡」と記され、頼朝が亡くなった年の六月、病のため十四歳で亡くなったと記されている。『吾妻鏡』には、頼朝亡き後、乙姫を入内させるような動きがあったことをうかがわせる直接的な記述はないし、上京したことをうかがわせる記事もない。しかし、在京の御家人を通じて後鳥羽院に名医を派遣してもらいたい旨を奏請し、院宣によって医師が鎌倉に派遣され、また、『尊卑分脈』に、「蒙女御宣旨」とあることから、頼朝在世中に何らかの動きがあったことが推測されるのである。

ところで、娘を入内させ、その娘が男皇子を産み、その男皇子が天皇になれば外戚となって権力を振るう、という構図は、平清盛が摂関政治に倣って行なったことである。

『愚管抄』には、頼朝が死の直前に九条兼実宛てに送った手紙の内容について、「今年必シヅカニノボリテ世ノ事サタセント思ヒタリケリ。萬ノ事存ノ外ニ候」と記され、頼朝は、九条兼実とともに政治を執りたいと思っていること

とともに、現実には思うにまかせないことが多いと述べていた。もしかしたら、鎌倉幕府の中にあって、朝廷協調路線をとり、朝廷の政治に関わろうとする頼朝に対して、それに反発する北条氏を中心とした御家人たちの動きがあったのではないかと推測されるのである（密かに反頼朝勢力が形成されつつあったか）。

頼朝は、もともと京で育ち、十二歳で皇后宮権少進に就任している。下役であったとしても直接朝廷の政治に関わり、また宮中の雰囲気にも馴染んでいた。その後、皇后宮であった統子内親王が上西門院となると女院蔵人になり、さらに六位蔵人を経て、十三歳で元服すると同時に従五位下に叙され、右兵衛権佐に就任している。つまり、頼朝は、もともと持っているアイデンティティーが貴族なのである。平清盛のように、朝廷を支配したいという野心があったとしても不思議ではない。元木泰雄氏は、平清盛が為しえなかった地方武士の掌握に成功した頼朝は、朝廷を支配することを目指し、公武を合体させた空前の権力を手に入れることを目前にしていたと述べている[30]。

このような朝廷政治に関わろうとする頼朝の意向を最もよく理解していたのが、徳大寺実定など貴族社会とも太いパイプを持ち、貴族社会の教養を身につけていた梶原景時ではなかったか。

『愚管抄』には、頼朝が最初に上洛した際の後白河法皇との対話が記されているが、頼朝は後白河法皇に、上総介広常が朝廷側に配慮する頼朝を批判し反発したため、梶原景時に討たせたと語っている。それを聞いた慈円は「ソノ介八郎ヲ梶原景時シテウタセタル事、景時ガカウミヤウ云バカリナシ」と記している。頼朝は梶原景時のことを、朝廷協調路線を理解している御家人であるとして後白河法皇に紹介していたのである。これによって梶原景時は、後白河法皇始め京の貴族に、頼朝が最も信頼する御家人であること、また、頼朝の朝廷協調路線に同調する御家人として好意的に受け取られていたのである。

しかし、他の東国武士の考えは違っていたと思われる。一一八五年、頼朝によって全国に守護・地頭が置かれるまで、東国武士は国司や荘園領主に支配され搾取される存在であった。[31] それが地頭設置によって、ようやく土地の所有が認められ、また兵糧米を確保する安定した生活の基盤が保証された。それから、まだ十五年ほどしか経っていない。東国武士にとっては、地頭が設置される以前の搾取されていた時代の記憶が脳裏に鮮明に残っている。朝廷政治に組み込まれることは、かつての暗黒の時代が再びやってくるのではないかという怖れにつながったとしても不思議ではない。東国武士にすれば、「もう二度をあんな生活はしたくない」という思いが強かったと思われる。東国武士にとって、京の文化は憧れではなく、朝廷支配を連想させるものに他ならなかった。東国武士にとって大事であったのは、所領が安堵され生活が守られることであったのである。承久の変で、東国武士が朝敵になることを厭わず一致団結して戦ったのも、自らの生活権利を守るためであった。

八、『吾妻鏡』にみる梶原景時の変

梶原景時が鎌倉を追放され討たれるまでの流れを『吾妻鏡』によって確認すると次のようになる。

頼朝の死後、長男の頼家が十八歳という若さで将軍の位に就いたが、建久十年（一一九九）四月十二日、この若い将軍に対し、幕府の重鎮たちは、諸訴論について、頼家の直断を停止し、北条時政、義時以下十三人の合議制によって決定することを定めた。これがいわゆる鎌倉殿の十三人である。そのメンバーは以下の通りである。

北条時政、北条義時、大江広元（文官）、三善康信（文官）、中原親能（文官）、三浦義澄、八田知家、和田義盛、

比企能員（源頼家に近い御家人）、安達盛長、足立遠元、梶原景時（源頼家に近い御家人）、二階堂行政（文官）

本郷和人氏は、十三人の合議制を敷いたのは、頼家が頼りなかったからではなく、有力御家人が、将軍の権力が強くなりすぎていることに対する危機感を抱き始めたからであるとし、この体制を敷くことを主導したのは北条時政に間違いないと述べている[32]。

景時弾劾のきっかけとなったのは、正治元年（一一九九。四月二十七日に改元）十月二十七日、阿波局が結城朝光の耳に入れた告げ口である。阿波局は、この二日前、結城朝光が「忠臣は二君に仕えず」と言ったことを、景時が、頼家の治世を誹ったことに他ならず断罪すべきだと頼家に言上したと言い、そのため朝光はその難を逃れることはできないでしょう、と告げたのである。狼狽した結城朝光は三浦義村に相談し、和田義盛、安達盛長が仲間に加わり、中原仲業に景時弾劾の訴状作成を依頼したのである。

阿波局は、北条政子の妹で源実朝の乳母である。後述するが、北条時政は、頼家を排除して実朝を将軍に就ける機会を狙っていた。この阿波局による結城朝光への告げ口は、北条時政によって仕掛けられた源頼家排除のための策略であった可能性が高いのである。

同年十月二十八日、訴状に御家人六十六人が加判し、大江広元に手渡した。しかし、景時を不憫に思った大江広元は十日以上も訴状を手元に置いたままであった。十一月十一日、御所で参会した和田義盛は脅迫まがいに大江広元を責め、広元は仕方なく頼家に訴状を渡した。

十一月十二日、大江広元から訴状を受け取った頼家は、梶原景時に訴状を下し、是非を抗弁するように申し渡したが、景時は、何ら抗弁することなく、十三日、子供親族を率いて鎌倉の屋敷から相模国一之宮の館に下向したのであ

る。その六日後、鎌倉に残してきた梶原景茂は、源頼家が比企能員の屋敷で行なった蹴鞠の後の酒宴の場に伺候し、頼家から景時に対する訴状が出されたことを告げられた。景茂は、「頼朝在世中はその寵愛が抜きん出ていたが、頼朝亡き後はその寵愛もない。どうして讒言を行うようなことがあろうか」と返答し、列座の御家人たちは神妙であるとささやきあった。

十二月九日、梶原景時は一之宮の所領から鎌倉の屋敷に戻った。景茂から頼家や御家人の反応を聞いて、幕府に復帰できると踏んだのであろうか。しかし、十二月十八日、梶原景時は、鎌倉から追放され、屋敷は破却され永福寺の僧坊として寄付された。鎌倉には、もはや梶原景時の存在する場所は無いということが明らかな形で示されたのである。十二月二十九日、結城朝光の兄小山朝政が、梶原景時に替わり播磨国の守護に補された。

翌年一月二十日、梶原景時一族は、一之宮の館を密かに逃れたが、すでに幕府の監視下に置かれていたため、飛脚によって直ちにその報が幕府にもたらされた。そこで、三浦義村、比企能員らの軍兵が梶原景時討滅のために派遣され、駿河国清見関において、在地の武士と合戦の末、梶原景時を始めその子息が討たれたのである。

梶原景時討滅の派兵を決めたのは、北条時政、大江広元、三善康信による審議によってである。大江広元、三善康信は文官であり、実質的に派兵を決めたのは北条時政であった。また、駿河国の守護は北条時政である。時政の命令によって在地の武士が待ち伏せしていたのである。

本郷和人氏は、時政の陰謀という視点からこの景時失脚の顛末をみると、明快な筋書きが浮かび上がってくる、として、結城朝光に景時が讒言をしていることを伝えた阿波局は時政の娘であり、在地の武士が待ち伏せした駿河国の守護は時政であったことを上げている。また、結城朝光の兄小山朝政が、梶原景時に替わり播磨国の守護に補された

のも論功行賞のにおいがする人事である、と述べている。[33]

九、『玉葉』『愚管抄』にみる梶原景時の変

それでは、梶原景時の変は、京の貴族社会ではどのように受け止められていたのだろうか。『玉葉』と『愚管抄』に記される記事から考えてみたい。

『玉葉』正治二年（一二〇〇）正月二日条には次のように記されている。

宗頼範光等談じて云はく、関東兵乱の事、申し上ぐる旨ありと云々。梶原景時、他の武士等のため、猜み悪まれ、この事を鬱するに依り、頼家の弟童（名千万、主君となす）を以て頼家を伐つべき由、武士等結構の旨これを讒す。即ち他の武士等に問はるる処、景時を召し合はさるべき由を称す。忽に以て対決の間、景時舌を巻き、謀讒忽に顕はれ、景時並びに子息等、皆悉く境内を追払はれ畢んぬと云々。[34]

また、『愚管抄』には、北条氏による頼家排除と実朝将軍擁立を記す一連の記事の中に次のように記されている。

建仁三年（一二〇三）九月二日。北条時政が実朝を将軍の位に就けるために、陰謀によって比企能員をだまし討ちにし、一族郎等が討たれ、一幡（六歳）は若狭局に抱かれて屋敷を脱出したが、十一月三日に討たれた。病気のため大江広元の屋敷に据え置かれ監視されていた頼家は、事件を聞いて傍らの太刀を取って立ち上がったが、北条政子に取りすがられ、そのまま修善寺に幽閉され、翌年七月十八日、修善寺で刺し殺された。

「コレヨリ先ニ正治元年ノコロ、一ノ郎等ト思ヒタリシ梶原景時ガ、ヤガテメノトニテ有ケルヲ、イタク我バ

カリト思ヒテ、次〳〵ノ郎等ヲアナヅリケレバニヤ、ソレニウタヘラレテ景時ヲウタントシケレバ、景時国ヲ出テ京ノ方ヘノボリケル道ニテウタレニケリ。子供一人ダモナク、鎌倉ノ本体ノ武士カヂハラ（梶原）皆ウセニケリ。コレヲバ頼家ガフカク（不覚）ニ人思ヒタリケルニ、ハタシテ今日カヽル事出キニケリ」。

『玉葉』の記事に記される、「他の武士等のため、猜み悪まれ、この事を鬱するに依り」というのは、梶原景時の変の後、鎌倉幕府方から京にもたらされた情報によっていると思われる。

実際は、梶原景時は北条氏による実朝擁立と頼家を討つ企みを察知し、頼家に告げたのではないか[35]。

しかし、他の御家人たちと対決したところ、御家人たちはすでに北条氏側についていた。景時は、弾劾する御家人たちに威圧され沈黙するしかなかった。そこで初めて、梶原景時は、我に利あらず、彼等とはやっていけない、と悟ったのではないか。梶原景時にとっての頼みの綱は頼家であったが、頼家自身、すでに北条氏によって排除される対象になっており、頼家にはどうすることも出来なかった。

『愚管抄』では、梶原景時が頼家の第一の郎等であり、「自分だけは」と思い上がり、自分より下の郎等を軽蔑したためであろうか[36]、訴えられて幕府によって討たれようとしたため、所領を捨てて上洛する途次で討たれた、としている。

『愚管抄』では、梶原景時を「鎌倉ノ本体ノ武士」といっているが、「本体」とは、真の姿、あるいは真髄を意味する言葉である。景時は真の鎌倉武士であった、といっていると見てよい。また、頼家が北条氏に討たれることになったのは、梶原景時が北条氏によって排除され討たれたことが原因であるとして、頼家の「不覚」であった、と記している。つまり、梶原景時討滅は、北条氏による頼家排除のための第一弾の仕掛けとして行なわれたとの認識であった

のである。

梶原景時追放の背後にあった、北条時政、政子による、頼家を排除して源実朝を次代の将軍に就けようとした動きとはおおよそ以下のようなものであろう。

頼家は、比企氏の館で生まれ、頼家を育てた乳母は、比企能員妻、川越重頼妻（能員の妹）、梶原景時妻であった。比企能員が後見人となり、頼家と比企能員の女若狭局の間には男子一幡が生まれている。そうなると、将来、将軍は頼家から一幡へと継承され、比企能員が将軍の外戚として幕府内の権力を握ることは明らかであり、北条氏は今までのように権力の中枢にはいられないことになる。そこで、北条時政、政子は、頼家を排し実朝を将軍に就けることで北条氏の権力を守ろうとした。実朝を将軍に就けるために、北条時政は、まず頼家の「一の郎等」である梶原景時を排除する必要があったのである。

十、北条時政と京都

梶原景時の鎌倉追放と討滅の背後には、北条時政による陰謀があったと考えられるのであるが、時政は、どのようにして鎌倉武士の反梶原景時意識をまとめたのであろうか。前述したように、梶原景時一族は、東国武士にはない京の風雅な文化、教養を身に帯びていた。京と東国という視点からみた時、京の貴族文化について、時政はどのような思いを抱いていたであろうか考えてみようと思う。

文治元年（一一八五）十一月二十四日、北条時政は、源頼朝の命を受けて入京した。時政の任務は京都の治安維持、

平家残党の捜索、義経問題の処理、朝廷との政治折衝など多岐にわたり、その職務は京都守護と呼ばれるようになる。十一月二十八日、吉田経房を通じ、義経らの逮捕のためとして「守護・地頭」の設置を認めさせている（文治の勅許）。その時、時政が吉田経房に謁見したことを、九条兼実は『玉葉』文治元年（一一八七）十一月二十八日条に次のように記している、

伝へ聞く、頼朝代官北条丸、今夜経房に謁すべしと云。

兼実は、時政のことを、「頼朝代官北条丸」と記し、その名さえ記していない。「丸」とは、一人前になる前の少年か身分の卑しい者に用いる称である。この記し方には、時政を見下した兼実の意識をうかがうことができる。

次は、その四ヶ月後、京都守護を一条保能と交代して鎌倉に下向する際に、時政が兼実のもとに下向の挨拶に行った際の『玉葉』の記事である。

北条時政（頼朝の妻の父、近日珍しき物か）来たり、明暁関東に下向すと云々。季長朝臣を以て条々の事を仰せ聞ゆ。件の男又籍を進らせ季長朝臣に与ふ。その次第咲ふべしと云々。田舎の者尤も然るべし」（文治二年〈一一八八〉三月二十四日条）

時政が離任の挨拶に来ても、兼実は直接会わず、家司源季長に対応させている。この記事では時政の名が記されているが、「珍しき物か」と記すのである。

この言い方には、『平家物語』巻十一「先帝身投」に語られる、壇ノ浦合戦の最後の場面における平知盛の言葉が思い合わされる。

平家軍の敗色が濃くなり、源氏の兵が次々平家の舟に乗り移って来るのを見た平知盛は、安徳天皇の御座所のある

船に参って掃除を始めた。それを見た女房たちが、知盛に戦はどうなっていますか、と尋ねた返答に、知盛は「めづらしきあずま男をこそ御覧ぜられ候んずらめ」と答えるのである。兼実の意識の中には、この平知盛の言い方に共通する、京では滅多に見ない東男、という侮蔑の念があったとみることができるだろう。

また、「籍」を奉るとは、名簿を差し出すことで、弟子になる時や臣従を誓う際に、その意思表示として差し出すものである。季長は、時政が鎌倉に下向するに際して「籍」を差し出したことについて、貴族社会のルールも知らない者として、その手順を笑っているのである。季長からそのことを聞いた兼実も「田舎者のやることはそんなものだ」と嘲笑っている。

時政が京都守護として派遣されたことについて、吉田経房とのつながりがあった、とみる見方があるが、その理由は、吉田経房が伊豆守であった時、時政が伊豆の在庁官人であった、というものである。しかし、時政が在庁官人であったことは確実に確認できることではない[37]。また、そうであったとしても、吉田経房にすれば、時政は自分に仕えていた伊豆の田舎武士に過ぎない。中央の貴族の意識として、とても対等な相手にはなり得ないのである。

『吾妻鏡』には、後白河法皇が時政の離任を惜しんで、「公家殊に惜しみ思食さるるの由、帥中納言勅旨を伝へらる、是則ち公平を思ひて、私を忘るるの故なり」（『吾妻鏡』文治二年三月二十四日条）と記されるが、これは表面的なお世辞である。貴族の本音は『玉葉』の記事に現われている。時政に対する貴族たちの対応がどのようなものであったのかは、おおよそ察せられるであろう。

時政が、京都守護を一条保能に交代した時に、時政は京の治安維持のために一族の平六時定を将とする被官三五人を京に残している。その際に、吉田経房を通じて奏進された折書にその被官の名が記されているが、無位無官で「い

ずれを見てもやまが育ちとしか云いようのない名乗りの者ばかり」で、京の治安も維持できず、「京中が静謐に帰するのは、下河辺行平、千葉介常胤の上洛を待たねばならなかった」という。[38]

このような家来を率いていた時政は、公卿をはじめ京の貴族たちからみれば、田舎者集団の頭領にしか見えなかったであろう。[39]

頼朝が、わずか四ヶ月で、京都守護の役目を時政から一条保能に交代させたことには、武断的に京都の治安を維持している間は良かったが、平時になった時には、貴族社会のルールを心得ていない、いわば文化的背景の異なる東国武士時政と、朝廷において朝務を行なう貴族との間に軋轢が生じることが予想されたためでないか。おそらく時政就任中から、その傾向が見えていたのではなかったかと思われる。

北条時政と交代し京都守護として朝廷との交渉に当たることになった一条能保は頼朝の妹婿で、父は藤原通重、母は徳大寺公能の娘という後白河院とも関わりをもつ貴族の出である。

元木泰雄氏は、九条兼実の態度に「在庁官人に過ぎない地方武士を嘲る面があったのは否定できない。平穏な情勢に移行し、公家との交渉が重要になれば、身分や立ち居振る舞いも大きな意味を持つことになる。治安維持に評価を得ていた時政を早急に交代させた背景にはこういう問題も関係したのだろう」と述べている。[40]

京において時政は、陰に陽に公卿たちから田舎武士としての扱いを受けたものと思われる。貴族たちにとっては、東国武士を軽蔑するのは当たり前という感覚であったかもしれない。しかし、軽蔑される側の武士はどのような思いを抱いたであろうか。人から受けた侮蔑に対する悔しさや恨みはそう簡単に消えるものではない。人間は感情によって動かされる動物である。時政が京において抱いた感情は、鎌倉に帰参して以降の時政の、京の貴族に関わる人間に

対する感情に影響を与えなかったとは考えにくい。朝廷支配を目指す頼朝への視線、あるいは、その頼朝と京の文化を共有し、厚い信頼を得ている景時を見る時の視線に少なからぬ影響を与えたのではないかと考えるのである。

そのように考えると、梶原景時弾劾の六十六人の連判状の背景には、時政が、前述したような東国武士にあった根強い京の文化への忌避感を巧みに煽って、梶原景時を囲い込む仲間を作った、という動きがあったのではなかったか、と思われるのである。

十一、『東関紀行』に記された梶原景時

梶原景時は、京においてはどのような人物として受け取られていたのだろうか。『東関紀行』の記事の中に探ってみよう。

『東関紀行』は、仁治三年〈一二四二〉に著わされた京から鎌倉までの紀行文である。作者は未詳であるが都人であろうと考えられている。宇津の山を越え、清見関の手前の辺り、「駿河国吉川」にあった梶原景時の墓のことが記されている。

なほ打ち過ぐるほどに、ある木陰に石を高く積みあげて、目に立つさまなる塚あり。人に尋ぬれば、「梶原が墓」となん答ふ。道のかたはらの土となりにけりと見ゆるにも、顕基中納言の口ずさみ給へりけん、「年々に春の草の生ひたり」といへる詩、思ひ出でられて、これも又古き塚となりなば名にだにも残らじと哀れなり。羊太傅が跡にはあらねども、心ある旅人はここにも涙をや落すらん。かの梶原は、将軍二代の恩にほこり、武勇三略の名

を得たり、かたはらに人なくぞ見えける。いかなることかありけん、かたへの憤り深くして、忽ちに身を滅ぼすべきことになりにければ、ひとまども延びんとや思ひけん、都の方に馳せ上りけるほどに、駿河国吉川といふ所にて討たれにけりと聞きしが、さはここにてありけりと哀れに思ひ合せらる。讃岐の法皇配所におもむかせ給ひて、かの志度といふ所にてかくれさせおはしましける御跡を、西行修行のついでに見まゐらせて、「よしや君むかしの玉の床とてもかからんのちは何にかはせん」と詠めりけるなど承るに、まして、下ざまの者のことは申すに及ばねども、さしあたりて見るには、いと哀れに覚ゆ。

あはれにも空にうかれし玉鉾の道の辺にしも名をとどめけり(41)

「羊太傅」とは、晋の羊祜のことである。人徳があって人々に敬愛され、死後峴山に碑が建てられたが、それを見て皆が涙をこぼしたので、堕涙碑と称されたという。「武勇三略の名を得たり」と言っているように、景時は武勇に優れ戦略家としても優れていたとしている。「かたはらに人なくぞ見えける」は、傍若無人というのではなく、権勢を振るったことをいっている。それが、都における梶原景時評価であったと思われる。

西行が崇徳院の墓所を訪れて和歌を手向けたことを引き合いに出していることは、梶原景時の霊も崇徳院と同じように無念の思いを抱いているであろう、という同情の思いからであろう。「いと哀れに覚ゆ」として詠まれた和歌も、「かわいそうなことに空中に浮かぶ魂は、この玉鉾の道のほとりのお墓に名を留めることになってしまった」と、景時の無念の思いに寄り添い、景時の魂を慰めているのである。

梶原景時一族が鎌倉を追放され、駿河で討たれたことは四十二年前の出来事であったが、都の貴族の記憶に残る事件であった。作者が、梶原景時を羊太傅になぞらえ、哀悼の和歌を手向けていることからは、梶原景時は都人に好意

的に受け取られていたことがうかがわれるのである。

十二、梶原景時の怨霊

一方、鎌倉幕府内においては、梶原景時は怨霊になったとされている。

『吾妻鏡』承元三年（一二〇九）五月二十日条に次のように記されるのである。

法華堂に於て、故梶原平三景時幷びに一類の亡卒等の為に、仏事を修せらる。導師は真智房法橋隆宣なり、相州参らる、是日来営中に怪異有り、又御夢想の告有り、仍つて且は以て修善し、彼の怨霊を宥められんが為に、俄かに此儀に及ぶと云々。

幕府内に怪異があり、また将軍実朝に夢想の告げがあったため、急遽法華堂において故梶原景時一族の怨霊を宥めるための鎮魂の法要が行なわれ、北条義時が参列した。

「怨霊」は、「身辺に生じる災厄を「怨霊の祟りだ」と思う人がいなければ発生しない」[42]。政治的勝者は権力を獲得する中で追い落としていった敗者の「怨霊」の怨みの念を感じ取るのである。「祟り」とは、もともと神がその怒りを災厄という形で人間に対して示したものである。敗者が、生前に優れた力を持った者であれば、死後、その力が神的な祟りとなってこの世の勝者に対して災厄を及ぼすと考えられた。北条義時、源実朝が、いかに梶原景時に対する「負い目」を感じていたかということである。

ということは、この記事は取りも直さず、梶原景時の変は、北条氏による冤罪事件であり、景時には何の落ち度も

無かったということを逆に証するものである。

ところで、北条氏における梶原景時の怨霊への恐怖は、この法要によって消えたわけではなかった。『大覚拾遺録』（建長寺開山大覚禅師、蘭渓道隆の語録[43]）によると、蘭渓道隆が住持をしていた建長寺において、梶原景時を供養する梶原施餓鬼が営まれるようになる。『大覚拾遺録』の内容はおおよそ次のようなものである。

夏安居の最後の日（七月十五日）に盂蘭盆会を修した。儀式が終わった頃、一騎の武者が駆け込んで来た。武者は、施餓鬼法要が終わったのを見て、遅れてきたことを悔やんで帰ろうとした。それを見た禅師は、武者を呼び戻し、その武者のためにもう一度施餓鬼法要を営んでやった。武者は禅師に恭しい態度で、「私は梶原景時の霊である」と名乗り、禅師を拝み感謝して去って行った。それ以来、毎年七月十五日には、今に至るまで、盂蘭盆会が終わった後に特に施餓鬼会を修している。それを名付けて「梶原施餓鬼」というのである。その法要では、般若心経を梵音で読誦するのである。

宝治合戦に勝利し、三浦氏一族を滅ぼし、北条氏による執権政治の地盤を固めた北条時頼にとって、梶原景時の霊は、冥界からいつ北条政権の屋台骨を揺るがすかもしれない怖れとして意識されていたのである。そこで、北条時頼は、梶原景時の霊を鎮めることによって北条政権の安定を図るため、時頼開基の建長寺において、毎年鎮魂の法要を行い、そのための「物語」を作った。それが梶原施餓鬼の由来であったのである。

北条氏は、執権としての権力を獲得するために、比企氏一族を始めとして、和田氏一族、三浦氏一族を滅ぼしてきた。しかし、それらの氏族に対して鎮魂の供養が行われることはなかった。北条氏の論理からいえば、彼ら一族は滅ぼされるべくして滅ぼされた一族であったのである。しかし、梶原景時だけは、これら一族に対する意識とは違って

いたのである。喩えていえば、藤原氏における菅原道真に擬えられようか。菅原道真の怨霊は神に祀られることでその怨念は解消された。一方、北条氏は、仏教による法要の力によって、毎年、梶原景時の怨霊を鎮めていたのである。

なお、現在でも、七月十五日に建長寺の山門の下で、一般の施餓鬼法要が営まれた後、梶原施餓鬼が修され、『大覚拾遺録』に記されるように梵音で般若心経が読誦されている。

まとめ

私たちは、すでに作られたイメージによって人物や物事を見ようとする場合が多いのではないか。一度作られたイメージは、バイアスとなって付きまとい払拭するのが難しい。梶原景時は、讒言によって義経を滅ばした人物、という「悪」のイメージが強い。しかし、それは、いままで述べてきたように、『義経記』や幸若舞曲の義経物において作られたイメージによっている部分が大きいと思われるのである。

判官贔屓の浸透とともに、梶原景時は、本来は源頼朝が背負わなければならないはずの「悪」の部分を、頼朝に変わって背負わされたといってもよい。その背景には、武家社会の創始者である頼朝を悪役にしないという中世社会の風潮が関わっていた。

しかし、覚一本『平家物語』の内容を読んでいくと、梶原景時には、讒言する理由があったことが、梶原景時の「物語」として語られているのである。また、『吾妻鏡』に記される讒言者梶原景時像も、『吾妻鏡』が梶原景時を滅ばした北条氏による執権政治以後に編纂された歴史書であることを考えれば、景時を貶しめるための作為が入っていない

とは言えないのである。

梶原景時像の造型において、頼朝との関係でみていくと、頼朝は景時の能力を評価して信頼していただけに止まらない。もともと貴族としてのアイデンティティーを持つ頼朝は、和歌や連歌を通して、京の貴族社会の文化を共有し合える相手として、景時に対しては他の御家人に抱く以上の親近感を抱いていたと思われるのである。また、貴族社会における文化は、景時一人のみならずその子息たちにも及んでいた。景時一家は、東国の武士にはない京の文化や教養を帯びた一族であったのである。しかし、それはまた同時に、東国武士の側から見れば、ある種異質な存在であったともいえよう。(44)

頼朝は後鳥羽天皇の治世になって以降、積極的に朝廷政治に関わり、朝廷支配を目指すようになるが、そのことを最もよく理解していたのも、京の貴族社会と太いパイプを持つ梶原景時であったと思われる。しかし、北条氏を始めとする東国武士には相容れない方針であったのではないか。頼朝死去の後、頼家が将軍になると、景時は頼家の「一の郎等」として頼家を支えるが、北条時政による頼家排除、実朝将軍擁立の策略の中で、結城朝光を頼家に讒言したという阿波局の告げ口を発端として御家人六十六人の連署による訴状を提出され、鎌倉を追放され討たれることになってしまった。六十六人もの御家人が連署した背景としては、京都守護時代に公卿たちから田舎者として扱われた時政が、東国武士の中にある朝廷や貴族への忌避意識を煽って仲間意識を作ったことが考えられよう。またそれと同時に、頼朝の寵愛が抜きんでていた梶原景時に対する東国武士たちの妬みの感情もあったであろうと思われる。(45) さらに、東国武士たちが抱いていたであろう、京の文化と教養を身につけていた梶原景時一家への、自分たちとは肌合いが違うという違和感を、時政が巧みに束ねたのではないかということも考えられるのである。

梶原景時は、頼朝在世中は御家人の中で最も頼朝の信頼を得、頼朝亡き後は、頼朝を継いだ頼家を誠心誠意支えようとしたと思われる。その姿が、「鎌倉ノ本体ノ武士」と評される所以であったと思われるのである。

注

（1）小松和彦『「伝説」はなぜ生まれたか』序章「「物語る行為」の宇宙 出来事・記憶・歴史」（角川学芸出版、二〇一三年）

（2）野家啓一『物語の哲学』第二章「物語と歴史のあいだ」（岩波現代文庫、二〇〇五年）

（3）覚一本『平家物語』の本文引用は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠った。

（4）加地伸行『論語』（講談社学術文庫、二〇〇四年）

（5）『吾妻鏡』元暦元年（一一八四）八月十七日の条には、義経が左衛門少尉に任ぜられたことを知った頼朝は、「頗る武衛の御気色に違ふ」様子で、義経が「左右無く聴されざるの処、遮りて所望せしむるかの由、御疑有り。凡そ御意に背かるる事、今度に限らざるか」と記している。

また、『吾妻鏡』文治元年（一一八五）四月十五日条には、「関東の御家人、内挙を蒙らず、功無くして、もつて多く衛府・所司等の官を拝任す。おのおの殊に奇怪の由、御下文をかの輩の中に遣はさる」とあり、官職を得た者は「在京して陣役を勤仕せしむべし。すでに朝烈に厠はる。なんぞ籠居せしめんや。もし違ひて墨俣以東に下向せしめば、かつはおのおのの本領を改め召し、かつはまた斬罪に申し行はしむべきの状、件のごとし」とある。さらに一人一人の容姿をあげつらって辛辣に非難している。なお、『吾妻鏡』の本文引用は『新版 全訳 吾妻鏡』（新人物往来社）に拠る。

（6）「含状」には、「判官の孝養には、くれ〳〵梶原父子が頭を刎ねられ、義経が精霊に下し預かるべし。しからずは、悪霊となつて、当家を滅ぼしたてまつらん」と記されていた。頼朝は、景時をすぐにも切り捨てようと思ったが、「忠節深き者」であるので、死罪に行なうことはできなかった。しかし、その後、景時は的矢の前を横切り射殺されてしまった。人々は義経の「憤り」によるものと噂した、と記されている。（角川源義・村上学編『義経物語 赤木文庫本』、角川書店、一九七四年）

（7）浅原美子・北原保雄校注『舞の本』（岩波書店、新日本古典文学大系）

（8）市古貞次『中世小説の研究』（東京大学出版会、一九九五年）

（9）佐伯真一「源頼朝と軍記・説話・物語」、説話論集第二集『説話と軍記物語』〈清文堂、一九九二年四月〉、同『平家物語遡源』所収、若草書房、一九九六年）

（10）『吾妻鏡』元暦元年（一一八四）正月二十七日条によると、木曽義仲討伐の合戦報告において、安田義定、源範頼、源義経、一条忠頼らの飛脚が到着し報告するが記録を持参してのものではなかった。その後、梶原景時の飛脚が到着した。「これ討亡・囚人等の交名の注文を持参するところなり。方々の使者参上すといへども、記録する能はず。景時が思慮なほ神妙の由、御感再三に及ぶ」と記される。

（11）高橋修『熊谷直実 中世武士の生き方』（吉川弘文館、二〇一四年）。蓮生譲状が自筆であり、訴訟時には熊谷直実は既に蓮生であったことを明らかにしたのは、林譲「熊谷直実の主出家と往生とに関する史料について―『吾妻鏡』史料批判の一事例」、『東京大学史料編纂所紀要』一五号、二〇〇五年。高橋修編『熊谷直実』所収、戎光祥出版、二〇一九年）

（12）頼朝と甲斐源氏との関係および頼朝による安田父子粛清については、秋山敬『甲斐源氏の勃興と展開』（岩田書院、二〇一三年）に述べられている。

（13）『吾妻鏡』正治元年（一一九九）十一月十八日条。源頼家から父梶原景時弾劾の訴状が出されていることを告げられたことに対する梶原景茂の返答の中にみえる。景茂は、「先君の寵愛ほとほと傍人に越ゆといへども、今において其の芳躅なきの上は、何の次をもつて非儀を行ふべけんや」（頼朝の寵愛を一身に受けること、ほとんど他に超えていたが、今はその頼みがない以上、何によって礼儀に背くようなことを行なうでしょうか）と返答した。

（14）『愚管抄』の本文引用は、日本古典文学大系（岩波書店）『愚管抄』に拠った。

（15）山本幸司氏は、頼朝の将軍権力の強化に景時が大きな役割を果たしたのではないかとして、景時が頼朝の側近として果たしていた役割について、『吾妻鏡』の記事をもとに、①情報収集・伝達、使節・交渉、②頼朝の身辺警護・随従、③軍奉行・軍目付・諸国守護、④警察・検察、⑤頼朝家の家司的役割を含む雑事の奉行等をあげ、ここからは景時の任務の多様性がうかがわれると同時に幕府の主要行事の殆どに参画していることが浮かび上がってくると述べている。また、景時の事績の特徴として、合戦における降人の助命・扶持に積極的に関わっている事例が多いことを、具体例をあげながら述べている（『頼朝の天下草創』、講談社学術文庫、二〇〇九年）。

(16) この逸話は『増鏡』（二条良基作か。一三三八年以降一三七八以前に成立）巻二「新島守」にも記されている。

(17) 著者の無住は、『雑談集』に「先祖、鎌倉ノ大将家ニ召仕テ、寵臣タリト云ヘドモ、運尽テ夭亡シ了ヌ。仍テ其跡継事ナシ」（巻三「愚老述懐」）と記し、また「十五歳ノ時、下野ノ伯母ガ許ヘ下リ」（同）と記している。この「下野ノ伯母」は「宇都宮系図に宇都宮頼綱の側室として、「平景時女」と記されている女性ではないかと見られている」（新編日本古典文学全集解説）。このことから、無住は梶原景時の子孫ではないかと考えられている。なお、『沙石集』の本文引用は、新編日本古典文学全集（小学館）に拠った。

(18) 山本幸司『頼朝の精神史』（講談社選書メチエ、一九九八年）

(19) 『真名本曽我物語』の本文引用は、東洋文庫『真名本曽我物語』1・2、〈平凡社、一九八七年・一九八八年〉に拠った。なお、『曽我物語』における梶原景時像については、大川信子「真名本『曽我物語』研究―梶原氏概説―」（『常葉国文』二〇号、一九九五年一一月）に、「頼朝の傍らにあってその手足となるだけでなく、政策〔処断〕にも関わる重臣」であったこと、「風雅の面においても頼朝の期待に答えるという人物」であったことが述べられている。

(20) 角川源義編『妙本寺本曽我物語』（角川書店、一九六九年）

(21) 本文引用は、河村全二『十訓抄全注釈』（新典社、一九九四年）に拠った。

(22) 『平家物語』巻十一「志度合戦」には、昔、神功皇后が新羅を攻めたとき、伊勢神宮から住吉・諏訪の二神の荒御魂が参加させられ、二神が船の艫・舳に立って新羅を容易に攻め落としたことが記されており、住吉明神は軍神としても信仰されていたことが知られる。

(23) 覚一本『平家物語』巻九「二度之懸」には、梶原景高が、先駆けをしようと逸り、それを止める梶原景時の呼びかけに、「もののふのとりつたへたるあずさ弓ひいては人のかへすものかは」と和歌で答える（『源平盛衰記』も景高の詠とするが、『源平闘諍録』では、景季の詠とする）。

また、『沙石集』巻五末「人の感有る和歌の事」には、「梶原三郎兵衛」が和歌を詠んで美女あやめを頼朝から与えられた説話が載せられている。

(24) 「板東平氏、中でも千葉氏の伝承を多く取り入れており、その成立については、千葉氏に近い者が、東国にあった『平家物語』に手を入れて作ったもので」「関東の在地色の濃い」性格を持つ『平家物語』諸本である（福田豊彦・服部幸造『源平闘諍録

（上）』解説、講談社学術文庫、一九九九年）。

（25）福田豊彦・服部幸造『源平闘諍録（下）』（講談社学術文庫、二〇〇〇年。『源平闘諍録』の本文引用は本書に拠った。）

なお、延慶本では、梶原景季が桜の枝を箙に指して戦い、平重衡の使者が、平重衡が詠み掛けた和歌の上の句を伝え、景季がそれに答える話になっている。

『源平闘諍録』における梶原景時像については、真野須美子「「源平闘諍録」の研究―梶原景時を中心に―」（『青山語文』一五号、一九八五年一二月）に、「鎌倉幕府の草創に功績のあった重臣」として語られていることが論じられている。

（26）「清濁を分かつ」とは、『日本国語辞典〔第二版〕』によると、「分別がつく。善悪、是非、優劣などを判断する」という意味であるとして、『吾妻鏡』の本記事を用例としてあげている

（27）篠原合戦において、最後の戦と覚悟して出陣した武蔵国の住人、斎藤別当実盛は、組み合った手塚太郎金刺光盛に「存ずるむねがあれば名のるまじいぞ」といって正体を明かさないまま討たれ、手塚太郎は木曾義仲の前に首を持参したが、誰か分からない。「名のれ名のれとせめ候ひつれども、終に名のり候はず。声は板東声で候ひつる」と言うのも聞いて木曾義仲は、「あっぱれ、是は斎藤別当でこそござんなれ」と言って樋口次郎を呼ぶ。斎藤別当と判断した材料の一つが東国訛りであった。平家の武将とは明らかに言葉遣いが違っていたのである。

（28）『吾妻鏡』建久六年（一一九五）三月二十九日条には、頼朝が、丹後局（高階栄子）を六波羅邸に招請し、北条政子、大姫と対面させ、丹後局には銀で作った蒔筥に砂金三百両を入れて贈ったことが記されている。

（29）橋本義彦『源通親』（吉川弘文館、一九九二年）

（30）元木泰雄『源頼朝 武家政治の創始者』（中公新書、二〇一九年）

（31）山本幸司氏は、「平氏一門のように貴族化した一部の武士を除けば、古代国家における武士の地位は「国には目代に随ひ、庄には預所に仕へ、公事雑役に駆り立てられ」（延慶本『平家物語』）るという程度のものだった」と述べているが（『頼朝の天下草創』、講談社学術文庫、二〇〇九年）、守護・地頭が設置される以前の東国武士の実態も同様であったと思われる。

（32）本郷和人『承久の変 日本史のターニングポイント』（文春新書、二〇一九年）

（33）注（32）に同じ。

（34）本文引用は、高橋貞一『訓読 玉葉』第六巻（高科書店、一九八九年）に拠った。

(35) 石井進氏は、梶原景時の変について、北条時政が北条氏を中心に進めてきた実朝擁立の動きを景時に察知されたため、かねてくすぶっていた御家人の不満に火を付け、先手を打って追い落としをはかったもの、としている（『日本の歴史7　鎌倉幕府』、中公文庫、一九七四年）。

(36) 京の教養や優雅な雰囲気を身に帯びている景時と対するとき、「清濁を分たざる」同輩の御家人たち、まして景時より下の身分の御家人たちは、時には侮られていると感じてしまうことが多々あったのでないかと想像されるのである。

(37) 関幸彦『北条時政と北条政子』（日本史リブレット、山川出版社、二〇〇九年）

(38) 奥野敬之『鎌倉北条氏の基礎的研究』（吉川弘文館、一九八〇年）

(39) 京の貴族が東国の武士たちをどのように見ていたのかについて、佐伯真一氏は、延慶本『平家物語』に、鳥羽に幽閉された後白河法皇を守護する武士たちについて記される、「ツベタマシゲナル顔ケシキ、ウトマシゲナル眼ヤウ、怖シトモオロカナリ」という描写は、武士に対する嫌悪感が表現されている、として「おそらく『平家物語』のより古い段階において、武士を「夷」として蔑視する見方は濃厚に存在したのではないだろうか」と述べている（「歴史学の視点と文学研究の視点―「武士的価値観」を中心に」、『平家物語の多角的研究』、ひつじ書房、二〇一一年）。

(40) 注(30)に同じ。

(41) 『東関紀行』の本文引用は、新編日本古典文学全集『中世日記紀行集』（小学館）に拠った。

(42) 小松和彦『神になった人びと』第二章「怨霊」（淡交社、二〇〇一年）

(43) 『大覚拾遺録』は『大日本仏教全書』（名著普及会）第九十五冊に所収。なお、『新編鎌倉志』も同内容の記事を載せる。

(44) 梶原景時が東国武士の中において、東国武士には無い京の風雅を身に帯びていたというイメージを持たれていたことは、『源平闘諍録』の逸話からうかがわれる。

(45) 妬みの感情を抱いた対象としては、頼朝の推挙によって美作国の目代をしていたこと、また、大国である播磨国の守護をしている等、経済的に恵まれていたこと、頼朝を介して徳大寺家という京の貴族と太いパイプを持っていたこと等が考えられるだろう。

（たなか・のりさだ／本学教授）